



ハンス・E・ヴルフ著
大東文化大学現代アジア研究所監修
原隆一・禿仁志・山内和也・深見和子訳

『ペルシアの伝統技術—風土・歴史・職人—』

平凡社 2001年 432ページ

生田 滋

本書はHans E. Wulff: *The Traditional Crafts of Persia. Their Development, Technology, and Influence on Eastern and Western Civilizations* (MIT Press, 1966) の全訳である。訳者の一人原隆一氏の解説によると、著者ヴルフの経歴は必ずしも明らかではないが、ドイツ人で、戦前の1930年代にイランのレザー・シャー・パフラヴィー国王がシーラーズに開設した高等技術専門学校の校長を勤めていたということである。1937年に国王レザー・シャーが同校を視察し、その際に伝統工芸技術と、それを担う職人工芸を継承するための新しいコースを開設することを命じた。これがきっかけとなって、著者はイランの伝統工芸に関心を持つようになり、各地を訪れて、伝統工芸技術に関する調査を行った。ところが1939年に第二次世界大戦が勃発し、イランも1941年にソ連軍によって占領された。著者はこのために抑留され、おそらく戦後になってドイツに送還されたものと思われる。この間に折角作成したノートや撮影した写真も失われてしまったが、著者は1956年になって、初めてイラン再訪の機会を得て、写真やその他の材料を追加収集し、本書を完成させたのである。

本書は金属工芸技術、木工技術、建築技術と製陶技術、織物技術と皮革技術、農業

と食料加工技術の5章と展望から成り、これに訳者あとがき、参考文献、文献解題、ペルシア語技術用語集、図版目録、索引、イラン地図が付されている。訳者あとがき、索引、イラン地図は訳者の加えたものであるが、それ以外はすべて原書のものである。各章の記述は体系的、かつ具体的である。たとえば第1章の「金属加工技術」は17項目から成り、「1. 古代イランの冶金術」に始まって、金属の精錬、加工、さまざまな製品の製作に言及している。次に第1章の項目を列挙してみよう。

1 古代イランの冶金術、2 鉱石採掘と金属の精錬、3 青銅、鉄の鋳物職人、4 銅細工職人・真鍮細工職人・ブリキ職人・暖炉作り職人・錫めっき職人、5 宝石職人・金細工職人・銀細工職人、6 金属打ち出し細工職人・彫金職人・銀細工職人・印象彫刻職人、7 金箔作り職人・針金作り職人・金糸作り職人、8 鉄工技術、9 鍛冶職人、10 釘作り職人、11 蹄鉄作り職人、12 刃物職人、刀鍛冶職人、鋏作り職人、13 鑪目立て職人、14 鉄砲鍛冶、15 秤作り職人、16 錠前職人 17 鋼鉄透かし彫り職人

ただ各項目の記述の精粗は一様ではない。歴史的な記述は文献史料に基づいて論じられているために詳細であるが、個々の技術になると、かなりのばらつきがある。たとえば14の鉄砲鍛冶に関する記述はごく簡単で、大部分は職人からの聞き取りに基づいた語彙集である（69-71ページ）。これは鉄砲鍛冶の技術そのものがすでにほとんど死滅状態だからである。また多数の写真やスケッチが記述をよく補っていることを指摘しておきたい。

本書に記述された伝統工芸技術はほぼ1930年代のものであるとあってよい。1960年代に入ると、イランでも近代化への動きが起こり、こうした伝統的な工芸技術は消滅の一途をたどった。従って本書の価値は、今は過去のものとなった伝統的工芸美術の具体的、体系的に記録したところにあるといえよう。ただ本書を通読して残念に感じたのは、馬車、船など、運輸交通手段に関する記述が見られないことである（車大工に関する記述はある）。あるいは1930年代当時、すでに伝統的な運輸交通手段は消滅していたのかもしれない。

イラン文明は世界の諸文明の中で揺るぎない地位を占めている。しかしイラン文明というとまず連想されるのは古代のゾロアスター教であり、『シャー・ナーメ』であり、中世のオマル・ハイヤームである。いわばイラン文明の精神的な面だけが良く知られているといえることができる。しかし本書はイラン文明にはそうした精神的な遺産を生み出すことを可能にした、すぐれた物質文化が存在していたことを教えてくれる。よく知られているように、インド、東南アジアにはイラン文明の影響が強い。これらの

地域に伝播したイスラムもイラン化したイスラムであった。ということは、これらの地域では、本書に記述されているようなイランの物質文化も強い影響力を持っていたに違いない。今後そうした観点からインド、東南アジアの伝統的な工芸技術を再検討する必要のあることは明らかで、その際に本書は大きな役割を果たすことであろう。

本書を通読して気をつくことの一つに、イランでも職人と知識人との接触がきわめて乏しく感じられることである。あるいはそれは著者の関心の外にあるテーマだったのかも知れない。しかし似たような状況がインド、中国でも見られることは良く知られている。そうした意味で職人と知識人が比較的密接に接触していたのが西ヨーロッパと日本であり、ヨーロッパでは産業革命が起こり、日本ではその成果を大急ぎで輸入して、近代化に出発することができた。つまり産業革命に支えられる近代文明は、イランなど伝統的な文明国から見ると、辺境の地に生まれた新しい文明であるといえることができる。これほどまでに進んだ伝統工芸技術を持つイランで、そしてインド、中国で、なぜ産業革命が起こらなかったのだろうか。著者はこの問題に触れてはいないが、本書を読む際に、考えるべき問題であるといえよう。

私が本書を読んでまず連想したのは、岩波文庫に収められているヨハン・ベックマンの『西洋事物起源』（全4冊、1999-2000）である。こちらのほうもヨーロッパの伝統的な事物の起源に関する丹念な記述で、読み物としても面白いものである。日本でいえば法政大学出版局から出版されているシリーズ「ものと技術の文化史」が本書に相

当するということができる。そうした意味で、本書は「記述を読む」楽しさを与えてくれるということができる。本書の丹念な記述のひだひだには長い年月にわたる数知れぬ職人の営みが織り込まれている。このような記述を「読む」楽しみは、現在の日本の専門教育が全く無視しているところである。ヨーロッパ人が営々として書き上げた記述を「理論化」、「体系化」などというもっともらしいスローガンのもとで、索引を利用して、とりあえず必要な事項だけをつまみ食いし、手っ取り早く論文に仕上げるとというのが、専門家になる早道らしい。もっともったいないのは、折角フィールドに出て、詳しいフィールドノートを作りながら、それに基づく「記述」を作るすべを知らない研究者が多いことであり、そうした指導のできない指導者の多いことである。本書はそうした意味でも良い教材となるの

ではなかろうか。

最後に訳書としての本書について一言したい。本書は現代アジア研究所のプロジェクトの一つであるアジアの伝統技術研究会による「南西アジアの伝統技術」に関する3点の図書の翻訳・出版の翻訳の一環として刊行されたものである。伝統工芸技術に関する図書の翻訳なので、さぞかし大変だったことと思う。訳者の方々の努力に敬意を表したい。ただ難をいえば、「訳者あとがき」は図版目録の次、索引の前に置かれるべきであった。さもないと、文献解題、ペルシア語技術用語集が訳者の編纂したものであるかのような印象を与えかねない。また文献解題に翻訳をも含む日本語文献への言及、原書が刊行された1966年以後に刊行された業績についての補遺があれば、より完璧な形になったと思われる。